

女學校
用讀本

源氏物語拔萃

紅葉頌

四



あはれそいふべし、
 眼目
 ひろよといふと、
 全篇の眼目なること、
 相違れ巻の末まで、
 志めつれど、は巻に
 も何事かあはれを注
 ぎしつて、
 一小段の才一節つね
 よりもひろよと見え
 の、
 四小段の才一節
 おれどひろよ、
 かのへれど、五小段の
 才七節五のひろよか
 らやきて、又月日のひ
 ろりの、
 たり、又此巻を、
 一と改、

この日まげやうよきしたふよ、あぐのあつま
 たり。もののおのろき程よ。おれど舞のあし
 おとおも、
 のへる。これや佛のほ、
 づゆ。おれど、
 上達部。皇子。感泣。
 袖うちを、
 のもぎ、
 ぬりもむ、
 いかでたき、

十九号六

のふさや、
 才二節は、
 段の才三節、
 人のむれ、
 才一節は、
 七節は、
 皆眼目、
 眼目と、
 一才二節

とぞそらよめでつぎ、
 のふを、
 いかで、
 の中ね、
 もあ、
 いか、
 よう、
 今、
 相、
 容、
 さ、
 よ、
 ひ、
 と、

源氏物語

おまゝのあ

三

お面けるまに買けよ
まに源と密通の
くまのまに○あいの
ふちをいんくらまの
あれが○おのい
はとのあ成りりかま
着まはとのまは
まの遠慮ナクえあ
はんの鬼ま速まほ
いらふるりあひ
○あいの片相手を
申物をいふ○け
あひ○あまのい
○家の○家柄
の子といふま
まのまあひの
やうまあひの
まのま○あ
目ま今日試樂な

着つばた。お面けるまに買けよ
めりていんま。とおぼきをよ。あいのま。ちあ
いひらふ。あひやあてはとのあ成りりあ
あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ひつとま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ

十九号七

れど、かやうは優
ゆいさを、葉雀池に
あつたのまのま
まのま○あ
く寂々んま、まのま
まのまのま

一小段の才三

お思ふよのま
源のまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま

源氏物語

お葉のあ

四

あせぬ。ふのあひま。あひま。あひま。あ
やま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ
ま。あひま。あまあま。あひま。あひま。あ

お思ふよのま
源のまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま
まのまのま

あゝに消息の結尾の
 の御之甚多しとの
 さま〇〇の人のま青
 海波に唐樂をかろじ
 のふら、遠るれが知り
 難う事ごと昨日の唐舞
 舞のふ状、表まで忘
 れがたしとのさま〇
 舞まで記し、後ののね
 てもしつうしうひて后
 上上のふだ地のさま
 とのさま〇〇〇〇〇〇〇
 れで微笑え〇持舞の
 やうまうし大切〇
 たるのふらまへん

みくら人の袖あつとふは
 てあをれとはなき。大方は
 なうめぐりつう。かやうの
 のへぐ。人のみうど中ぞ
 さ兒と比ふのうねでもと
 やうまむろけて又あつり
 けあよほりもつぼよりの
 行者は。皇子。ちたなど
 まつりなまへり。まはも
 けふねどもさぎめむら
 唐の朝廷

〇つゝ―たるま―手
 をさ―たる舞どか
 〇世をひびのまに初を
 けよめていへん〇
 ゆい――大切のま
 上は神るとかよめ
 やつづきとあ―
 史は―神往市折ると
 ささ―世のま〇あ
 ぢちるり強え過な
 どのま〇〇い
 垣代人、三列りて
 舞人の高―垣のぬく
 するをり〇〇宰相
 あつり旧法よま國誰
 たる―とあり〇〇
 なるべでる―舞の師
 〇おの―こりあて
 は舞の藝のこゝん

したる舞ども。種々多きお
 のおと。世がむらひ。びとの源氏の影
 ゆい―おほされ。あぢさ
 もをさせたまふを。ことごとくとあをれぐり
 ゆるよま。弘徽殿の女侍。あたがちなりとよ
 さむらひ。あいつらなど。殿上人地ぢ
 と世の人思われたる。有職のま
 させぬ。宰相ふり。左衛門督右衛門督
 り右のむくれをとおさる。あひの師どもな
 よよなべてる。ねをとらつ。おのこりあて

源氏物語

みまのあ

五

十九号八

○このたのきいお舞の
上の才二節よりみち
のうけやさうぐり
とある思存之○四十
人のこのいしう上の垣
代とおれど○お舞の
のかげやまきおしる源
のまははを舞出のふ
く○いとあそろいさ
感賞のあまうりあろ
一きこ○けおされた
る源氏の容色は気壓
せたるふ○左大おは
人三節より源のあ
ごーのおまふの教透一
をててお菊をよーあ
へー左大おとつてあ
るべーかうやうの三系
圖よるまき人名は外
よるあり皆をふぶあ

んをらひける。こいふあまふ舞のあげよ。四十人のあ
以志ろいひまき吹そたる物の者どもよ。あひた
る松風。まことのこやまあろーとあそそ。あま
まよひ。いりくよちりよふ木のたれをのよりま
海波のうぐやまおしるまはらとおそろーまよ
でんゆ。うごーのお舞いしうちり花まきて。あまの
よほひよけおされあまこちまされま。あま
なるまきく城をうて左大おさーあへのふ一小段
の才四
第。朱雀院へけ幸の登のまゆん。あまよこたあまお舞ふ
のうげよとある。上の才二節よりみちのあげやさうぐ
一とある。地
照るなり。目くれあふるほどよ。あまをまありうち

十九号九

りよ又返たる人なれ
むなり。

一小才五節
又返つたのはあまのま
空のけ一まきか今日の
それの日あることをま
りうはとひあまこ○
りりあや入綾へ入綾ハ
樂の終りの手之○か
のこーあままきあま
人何れあまぬわん
○山の本のあまうづ
かれたまへへ世は埋
もせしる人まきと
いふこと○兼秀殿
のあまの四のここと
兼秀殿ハ旧注は源と
るなり。四のここと相
ままの才二節の才之
○秋風樂樂の名之

志ぐれて。空のらまきまこーとまあはるまよま。
いしうまきまのこまきくのいりく映ろひ
ドウモナラヌ
えろぬをうごて。試樂よりハ又一段おれろき手
くーたる。いりあやの程。そごろさむく。世の
と、わまをさび。物こーまきま記志る人な
どの。これおと思ぐれ。山の本のあまうづ
もれしるまきまこーあまのこまきま。あまご
おもーけり。兼秀殿のあまの四のこことまき
まき
まらひま。秋風樂まきまのこまきま。あまつたの
ん物あまうけ。これらはおかーろまのまきま。盡

源氏物語

お舞のお

六

盤渉調とあり○
 源と四の三との舞よ
 よりして他のおかしあ
 らざるれさゆえ○
 正三位志の「源後三
 位より正三位は叙せ
 られ」○正下のか
 以中後四位上
 あり正四位下も昇
 のふ○「のんたちあ
 上達部へ三位以上
 の人をり」○むあ
 の「源のあせゆ
 の」きとん

二小の才一節

ふいふん○ふいふんれ
 の「源若毒の」とよ
 よりて「若毒」は「大
 原の葵上方」で「若毒」
 のつとん○「二條院」
 は人むさへ「葵上
 の方」は「上の上」を
 さるまをあらで「源ハ
 よき」女を「迎へ」のり
 ると人の「り」を「信」
 て恨む「り」状○「り
 ち」の「あ」は「源家
 が」ちの「あ」は「ん」○
 「か」あ「あ」は「ま」は「ま」
 さ「び」に「ま」は「び」は「心
 の」む「む」思「ひ」が「け
 る」ま「ま」は「ん」が「む」ど
 り「よ」お「お」は「源」同「侍
 ち」どの「舞」とある「伏
 案」○「あ」は「源」は「源」

源氏物語

よければ。いどぐよめかうりらび。あがりてをいどぎ
 備一よやありらん。その夜源氏の中。正三位志
 のふ。中後正下の「い」は「い」は「い」だちめは
 りれ。さうべきあまうりのよろこび。源氏。これ
 又よひあれ。さうするれを。人のめをもおどろあ
 一。心をよろこごせ。源氏。むのの世ゆの「げ
 なる」
 一。小段の才五節。朱雀院へ「い」の夜のさゆえ
 と「い」り。相違帝。朱雀院へ「い」きあり。源氏。中後四
 の「天」等の舞を「観」覧ある。源正三位志の「い」を叙せり。
 源氏の「あ」
 源氏。そのころ。源氏。源正三位志の「い」を叙せり。
 や。源氏。いどぐひあり。き。源氏。を。こと。源氏。大。殿。は。いと

十九号十

のふいふんれ。いどぐよめかうりらび。あがりてをいどぎ
 備一よやありらん。その夜源氏の中。正三位志
 のふ。中後正下の「い」は「い」は「い」だちめは
 りれ。さうべきあまうりのよろこび。源氏。これ
 又よひあれ。さうするれを。人のめをもおどろあ
 一。心をよろこごせ。源氏。むのの世ゆの「げ
 なる」
 一。小段の才五節。朱雀院へ「い」の夜のさゆえ
 と「い」り。相違帝。朱雀院へ「い」きあり。源氏。中後四
 の「天」等の舞を「観」覧ある。源正三位志の「い」を叙せり。
 源氏の「あ」
 源氏。そのころ。源氏。源正三位志の「い」を叙せり。
 や。源氏。いどぐひあり。き。源氏。を。こと。源氏。大。殿。は。いと

源氏物語

の及者之十かあるが
してやがあること
○人よりさうは葵上
ハ源三ひかうぶりの
時より尺をめて所
らん隔さるものをと
○おれひさゆらん
をさうに源の心を葵の
知のしぬ前さうと
ものくもさう○つひ
よまじつひは葵の心
のさゆれり
○とありなり「源の
格別は源ひのさうと
二小ノ中二節
おれひさゆらん
源上のさう○又つひ
のさゆれり
源のさうひさゆらん
とありなり○おれ
ひさゆらん

おほゆ。ちかむさる。人よりちかむさるさめて
一あが。あそれもむむとさきさう。よ。おれひ
さゆらんをさむりのをぬほど。をあらめ。
つひはおれ。ちかむさるんとおれ。大やう。おれ
つひは。ちかむさる。ちかむさる。おれつひは
とあ。のさゆれり。か。い。ちかむさる。二小段の
大段。源の。源。源の上。さう。ちかむさる。おれ
れ。ちかむさる。源。源の上。ちかむさる。おれ
を。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ
よ。い。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ
む。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ

ちかむさる。源。源の上。さう。ちかむさる。おれ
れ。ちかむさる。源。源の上。ちかむさる。おれ
を。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ
よ。い。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ
む。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ

源のさう。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ
よ。い。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ
む。ちかむさる。ちかむさる。ちかむさる。おれ

之〇ゆめとちきくらば
云じたし物のため
らぬとさく〇お
ぼつあるくの〇惟
光より外の人の知ら
ぬさし二条院の人
くの知らぬ哉〇あ
のちくやもまに父
まハ兵卒々のまにま
の父兵卒々かばこそを
知りぬかぬん

二小ノ才四節

才二節之。源兵上を人よあらせどとて。二条院のまを
れたるおひま修せぬよままえ。はあまひはんうまて
ならりせるととつ。とあるハ。あま卷の思存ん。われ
卷。六小段の才四節。やどてほまはよと人ままあゆ。ハ
小段の才十節。はんまふもとあひひま。まひりあま
ままあふらら。まごあるまあま。一説は回んかま
とまかせたるまひら。て。姫。まハ。源とあひひ
かドの上とて句を切るべ。姫。まハ。源とあひひ
でままふとまひ。あままをこひまてままを
りあまひりまのあまま。ままひままひらら
のあま。よま。まま。こま。まま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

カハユラシと思ひま
ふ〇いれく〇ま
上の甚屈一〇あ
母たまき子とばあ
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

大とのまおまをまを。をう。いりたくてま
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

源氏物語

おまのあ

まけられたと云ふ○
 正しくして居るを
 正しくして居るを
 正しくして居るを
 正しくして居るを
 正しくして居るを

二小ノ身五節

てぞぐのひぬ命婦もただありきこえん
 れくおのつけもかゝるあ
 きまらよおぼあきてふとけぬ
 けりうりほりつけぬ
 くてきまゆをまられ
 ることよきせび
 とあひひひやと兵
 のあまひひひとさ
 をのまきよれは
 こにけりをおぼして
 りきまにのひー
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又

十九号十四

少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又

三小ノ身六節

少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又
 少納言はまじきより又

源氏物語

おぼのあ

十一

うよつと定ぬる男を設けてらと源の妻あることを始てしつゝ○あまづの俗シカツベラシウ○あまづの髪あけのあひだでもえびとて若ば巻よある無名○あまづは「はあめん中よあまづの男をもちたるとあまづ○あまづのをことて云「少納言さあどの夫ハ形まどよりあらぬと○今ぞおぼありけし今までハ源の子さあどのやうおぼたるとさ○兩年のあまづさあづは細な

どまうけしそまつりのひてふ。あまづのうとめの方れがわさるゝとめやうよてこそんこなまらせ孫もめはかまふ。福をたよ。イヤガリ五フナと少納言まことゆ。あまづのふりれぬを。まづのうとめをせまらんとていばらる。れうちよ。あまづは男まうけてけり。びんこのをこととてあまづ。みよここそあれ。あまづをあげよ。あまづのまをさるゝうけり。あまづと今ぞおぼ。志りける。まはり。源のうとめさあまづ。なまづの。あまづをさるゝまはけをひの。

二十号一

まらるれど男おちしと思ひまりのあまづの初志をなまづ○いとらうよげわぬかゝ男女の情をあらぬえ○周そひが副卧におの方れとえ、かやうよをさるゝあまづとていんおまなぬ

まらるれど男おちしと思ひまりのあまづの初志をなまづ○いとらうよげわぬかゝ男女の情をあらぬえ○周そひが副卧におの方れとえ、かやうよをさるゝあまづとていんおまなぬ

源氏物語

おまづのあ

十三

○あしづきいさるるほのまげんをうらふ
 ○かたあきしあび
 一〇あつあつ多
 左大玉殿携来りて
 おびむづらほのちりし
 ころへささせのあへん
 今日の為まは過おん
 内宴の時よ用おんと
 之内宴といふは三月の
 中は清涼殿にて文人
 召して宴會あはれそ
 時人々美簾をそ
 けおん
 ○それハ
 せ時ハ又別よまま
 ちゆると
 ○これ
 たゞよはひと通

うらみぬとせられて。うらみぬとせられて。
 のよはしとめておびむづらよ。左大玉殿
 びひて。ほの装束
 おびむづらよ。名づこのまは
 ぞのちりしころもさつこひたすどほく所を
 らぬをありよ。一のふいとあをれなりはれハ
 以えんたもといよ。ちゆるなるは。さやうのをりよ
 こそちよどもきこえのほど。大玉殿
 り。これハたぐめをれぬさ満るれをんとそ
 ちひてさ。せめてまつりよ。ちよよまろ川よあ

り人の飾り知らぬふ
 としてまひてほよさ
 させるあへん
 のひあり「左大玉殿を
 ちやて地よりいふえ
 ○たゆまゝまてゆえ
 したおくとちゆるを
 婿などいひて、出入さ
 せてえさへば上なく
 うれしん

三ノノ身三節
 さんざん「美彦之、美
 彦の事」○内宴は清涼
 殿に相奉りて、美彦は
 左大玉殿に侍りて、美彦
 の言敷は花もよ一院
 ハ寛平は皇女唯一
 まくとあり
 〇福ひの
 あまきよ「女房達源
 の成人志のあまきよま

づきたててんまらあまふよ。いけるあひあ
 り。満るよま。わらん人をいづりいきて
 えんよ。まらとあら。とん色に満る
 三小段の
 養上のちんのけさきさま。并に左大玉殿をいめてほを
 けらしと恨みのふ状を叙せり。さや、はあ、内をい
 ぬむありよ。とあるは、さや、とあるは、さや、とあるは、さや、
 んよ。養上のちんめ。うつ、家のおめておこ。とおぼしてほをさ
 づきいとるみるふさま。いとあはれよ。かきたまされたり。又、はあ
 よ。はんおどりい。こよなるく。と養上の内氣ををかきた
 る。美彦よ。於て。六條の消息。あまの車。さんざん。よ。とそ
 あ。あまの事。あまの起らん伏案なり。さんざん。よ。とそ
 ぬ。あまの事。あまの起らん伏案なり。さんざん。よ。とそ
 さ。あまの事。あまの起らん伏案なり。さんざん。よ。とそ
 女房詞
 ちよよまろ川よあ

あつらひく...
てあつらひく...
これより...
去年の三月...
姓志のひて...
十月より...
何れも...
ばん...
四月...
三月...
二月...
一月...
旧注...
三小ノ牙四節

志ま...
くめで...
ふよ...
の志...
もと...
あるに...
も...
身...
よ...
ひ...
三小
段の
二十号四

ああれど...
も...
説...
遺集...
きの...
元果...
三小ノ牙四節

よ...
あ...
中...
い...
め...
お...
ま...
さ...
く...
く...
う...
る...
お...
お...
十六

とこの心配を辨らばて
是れてん。○命まぶく
もまじるはは序よ
身うせさばとおぼせ
とも、弘徽殿の呪咀
て死ぬるいと祈りま
つゝの口の口をさ
よらうかへてさか
らんと思のつゝん。○
人まよへんまを
時かよへん入る舞の
ふん。○まがくま
てのあまを源の人のひ
てまをまを帝へ奉
せん。○むづの
げるの御を女房の
傳へていふるま
突ハむつの一げさ
およ、あらば、源よ
く似たるを恥のま

キヲハデマシテ
つゝりてゑん。ま
ける。帝へ
ることおぼし
心配シテ
ふゆとあてて人ま
つゝのあがりす
りて奏し侍らん。と
なる程なれを
おなる。さるい
源の容を
うづりつゝり
おのほるのお
鬼

二十号五

○此の心配は
る。○命まぶく
旧はよ、引かあれ
あよおまをぬん。○あ
やありつゝほどの
あやまち「源よ密通
したる過をん。○列の
まぞいとまをま
びありんまを
三小段五節

まゆ。あや
人のおのひとがめ
よまをまをぬん。○あ
りづづまよあ
ところろま
まあり。とり
あるまを
よあひ孫ひて
ど。なまの
はことまを
のくバ。ち
ムシヤウニ
ムシヤウニ
ムシヤウニ

源氏物語

おまのの

十七

のあは付てかえ○む
 中の安らぬ○い
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

よいひき出してまつらせ給ひてみこたち
 あまのつれねど。そをよのこらんわる月どよ
 りあけ^羽くれ。それおひいさへもあまのや
 たらん。いよこそおほきしれ。ちひたまは
 どい。これかみのあまのいよあらん。そ
^のいひこころまじりせのり。
 申ねのえおそのりろ。いよちー。お
 そろ。いよあまのけなも。ね。衣よ
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

ゆ。いよあまのけなも。ね。衣よ
 よあまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。
 ぬ。あまのいよあまのちー。後あちぬし。

○引くつゝの途な
 でのるをさあ
 よめへて、さして
 おををさあよそへ
 つつるあふんいな
 ぐさまびしての
 きとのん○引れよ
 さのちん「引か後撰
 小治の坊のうら
 一接子ハよよそのな
 んよそへつてん」とあ
 らんを源あをを
 入のり、あよそへ
 られてんも慰やせん
 とあひ「……」
 ねよひひるきとん○
 引らんせうせて命ぬ
 源のあををあよそ
 らんよ入てん○神ぬ
 るのあ「いあを接子

る折ををらせのひて。命ぬのあのみよよかき
 のよとお母のよめし。
 引くつゝの途な
 さまするなでこのあ。おのよよそのあんとお
 ひのつゝも。あひるきせよそへりければとあり。
 さりぬづきひまよやありらん。引らんせうせ
 てあひちりあをりのあひらよ。あゆ
 をあはらるるも。あひらとあをぬよあえ一志
 らる。後して。
 神ぬるあはゆのりとおのよよそのあよめしと

またたり、ん袖
 のぬも縁とはあ
 きあよまややう
 とむとのなりあぬ
 るああぞとん○例の
 したるれさる例のあ
 く例あるま。と
 之○くつをれて失
 望のさ。○引れよ
 したるよも「源いん
 そこをを悪しとあ
 ひて卧ひひてもその
 悪しよのやあを
 ければ○引れよな
 ぐさめ源あやうよあ
 思よあ「……」西の
 着のあの中へつゝ
 りて、はらを慰めぬ
 ば、例のぬく西のあよ
 海りるあ。

まねぬやあとなでと。とづあり海のこのよか
 きさしたる。やうなる折よあこびたあから
 まつれる。例のことるれを。あひらとあをぬよあえ一志
 朽折ををれてあがめふ。あひらとあをぬよあえ一志
 びらきてい。あひらとあをぬよあえ一志
 づくとあしたる。あひらとあをぬよあえ一志
 ば、折のたあさめよあ。あひらとあをぬよあえ一志
 思のよ。四小段の才二節。源あをぬよあえ一志
 源のあ。ラチモナク。あひらとあをぬよあえ一志
 志どけな。あひらとあをぬよあえ一志
 シヤレタル。桂。あひらとあをぬよあえ一志
 ざれ。あひらとあをぬよあえ一志

人ざらん〜○かのみ
めり〜ひて「俗ギ
ヤウサンニシテハ〜
心さげよいさけて心
ナササウニ弱ケニテ
よるげ〜いさけハ同
ト〜いさけハ
往來言〜あよりのけ
ともかく〜

四ノ身六節

い〜「俗ギ」
〜○かのみげなるあ〜
〜「俗」の幼なるあり
あひだ〜○おほむい
〜と〜おほむい
〜のさ〜俗シヤ
〜ニ〜熱〜わ〜あ〜
〜るんを〜○〜
〜「〜」の〜
〜別せぬ〜ある。

甲〜○〜
〜りた〜は〜
〜帝の〜教訓を〜承志
〜て畏りた〜
〜○〜の〜
〜先〜入〜
〜ど〜は〜
〜ハ〜
〜中の〜
〜れる〜
〜○〜
〜何の〜
〜好色の〜
〜之〜
〜は〜
〜○〜
〜を〜
〜の方〜
〜○〜

源氏物語

〜として。〜
〜ひり人をものめあ
〜ひて。人〜
〜なげよ〜
〜くも〜
〜や〜
〜て。〜
〜め〜
〜とも〜
〜物〜
〜とよは〜

らん。〜
〜ら〜
〜と〜
〜あ〜
〜と〜
〜て〜
〜の〜
〜の〜
〜な〜
〜た〜
〜と〜

おほむい

を「容色あるのい
○月よもてを「殊
は愛一のうゑ○月
あるうやつう人
まある官女達○
かてをあるうゑ
「源は「何れも官女
達も承諾をばま
○あつて「やあ
源は「何れも官女を
又別のよなるらん
○引ろゝは「源の心
をみんとて「官女と
の中は「源は「あつた
「源は「いゝん○あつた
さつらぬほほは情
無くもなる「丁か
ほは「よもてを「い
○あつて「いゝん
「源は「何れも官女
達も承諾をばま

や「おほいさなれだ。よ「あるやうい人
おほいさなれだ。よ「あるやうい人
れもまよふは。ゆてをある「いゝあつて
よ。あつて「やあらんげよぞあや「うせ
「源は「いゝん○あつた
ま「源は「いゝん○あつた
さつらぬほほは情
無くもなる「丁か
ほは「よもてを「い
○あつて「いゝん
「源は「何れも官女
達も承諾をばま

を「容色あるのい
○月よもてを「殊
は愛一のうゑ○月
あるうやつう人
まある官女達○
かてをあるうゑ
「源は「何れも官女
達も承諾をばま
○あつて「やあ
源は「何れも官女を
又別のよなるらん
○引ろゝは「源の心
をみんとて「官女と
の中は「源は「あつた
「源は「いゝん○あつた
さつらぬほほは情
無くもなる「丁か
ほは「よもてを「い
○あつて「いゝん
「源は「何れも官女
達も承諾をばま

を「容色あるのい
○月よもてを「殊
は愛一のうゑ○月
あるうやつう人
まある官女達○
かてをあるうゑ
「源は「何れも官女
達も承諾をばま
○あつて「やあ
源は「何れも官女を
又別のよなるらん
○引ろゝは「源の心
をみんとて「官女と
の中は「源は「あつた
「源は「いゝん○あつた
さつらぬほほは情
無くもなる「丁か
ほは「よもてを「い
○あつて「いゝん
「源は「何れも官女
達も承諾をばま

あの上は源の思ひたるが
らぞやとののたまひ
けていぢえ。○おのころ
ぬ人ゆゑと引あへ
細よみくうらぬ人の
きせけるぬれまゐ
いとひうつくもおの
ほゆるこのまじり
さうぬまゝまゝ人よ
ぬれまぬもいとまぬ
とて内侍らよぬまゝ
まゝ人の為すいさき
でもと頼むたぐひの
人もあるれが源とれ
いひさすほどよや
れせぬ之内侍の帝の笑
めふを面目をしとも
思ふぬまゝと。○おの
らひ付よりり内侍
の内侍よ云よりり

好むを源の思ひたるが
らぞやとののたまひ
けていぢえ。○おのころ
ぬ人ゆゑと引あへ
細よみくうらぬ人の
きせけるぬれまゐ
いとひうつくもおの
ほゆるこのまじり
さうぬまゝまゝ人よ
ぬれまぬもいとまぬ
とて内侍らよぬまゝ
まゝ人の為すいさき
でもと頼むたぐひの
人もあるれが源とれ
いひさすほどよや
れせぬ之内侍の帝の笑
めふを面目をしとも
思ふぬまゝと。○おの
らひ付よりり内侍
の内侍よ云よりり

廿一号二

五ノオ二節
このついでに源の思ひたるが
らぞやとののたまひ
けていぢえ。○おのころ
ぬ人ゆゑと引あへ
細よみくうらぬ人の
きせけるぬれまゐ
いとひうつくもおの
ほゆるこのまじり
さうぬまゝまゝ人よ
ぬれまぬもいとまぬ
とて内侍らよぬまゝ
まゝ人の為すいさき
でもと頼むたぐひの
人もあるれが源とれ
いひさすほどよや
れせぬ之内侍の帝の笑
めふを面目をしとも
思ふぬまゝと。○おの
らひ付よりり内侍
の内侍よ云よりり

えお段の餘波え。又うよ内侍かひひりひりひり
りと結ぶる。後よ源と内侍のまゝよ。落會
のつ捧腹の一段を。はまも人よりいこと
かきぬべき伏案え。はまも人よりいこと
たもを。このついでに源の思ひたるが
らぞやとののたまひ
けていぢえ。○おのころ
ぬ人ゆゑと引あへ
細よみくうらぬ人の
きせけるぬれまゐ
いとひうつくもおの
ほゆるこのまじり
さうぬまゝまゝ人よ
ぬれまぬもいとまぬ
とて内侍らよぬまゝ
まゝ人の為すいさき
でもと頼むたぐひの
人もあるれが源とれ
いひさすほどよや
れせぬ之内侍の帝の笑
めふを面目をしとも
思ふぬまゝと。○おの
らひ付よりり内侍
の内侍よ云よりり

源氏物語

お茶のあ

二十九

あつたまのついでに
 人つきののさしはも
 みるよふれり、まや、間
 屋にあたり、ハ朝のこ
 と、飾りといふ羽を
 たり、まの夫妻いめん
 どうなるれ、あんな
 別ま、あんな
 五小ノ分三節

あつたまのついでに
 人つきののさしはも
 みるよふれり、まや、間
 屋にあたり、ハ朝のこ
 と、飾りといふ羽を
 たり、まの夫妻いめん
 どうなるれ、あんな
 別ま、あんな
 五小ノ分三節

廿一号四

あつたまのついでに
 人つきののさしはも
 みるよふれり、まや、間
 屋にあたり、ハ朝のこ
 と、飾りといふ羽を
 たり、まの夫妻いめん
 どうなるれ、あんな
 別ま、あんな
 五小ノ分三節

あつたまのついでに
 人つきののさしはも
 みるよふれり、まや、間
 屋にあたり、ハ朝のこ
 と、飾りといふ羽を
 たり、まの夫妻いめん
 どうなるれ、あんな
 別ま、あんな
 五小ノ分三節

源氏物語

お茶のあ

三十一

女も途つ立立ちあ
らゆりし中ねこそま
のどくされと云○
や世の中「餘我」ふうハ
よの誤るるべしと云
○この山引あ之花
もよ犬この山と云こ
の山なるいさや川い
さこころへて赤名も
らそれ人の問も知
はと答てうき名残
もらるる口唇むえ
○いとえんよま内侍
いらつや〜恨
すゆ〜○ひび〜と
思ひ迷惑よてん宛
さふ〜○さふま折
のま何ぞの時よハ
葵上よ内侍のさふそ
んと源を相とひあぬ

る志^{尾目}りめたり。源^源とてあさ〜もあらん。たち
るがうりり人こそいとほ〜られまこ
とはう^{ツライ}や世の中よ。といひあをせ。とこ
の山なる。とあ^五こみよくちう〜む。ささ〜その
後ハ。ともまれをよつ心で〜ま。りひむのふ
るくささひなる。い〜むのむり〜ま。人^{葵上}
お。とおほ〜さらる。女をるほいとえん^艶
よ恨〜るをさび〜とおひあひあひまひ
ふ中ねをいもうとのまよもささ〜りてひあ
〜ささ〜きをりのお〜〜せん〜とぞ

廿一号九

よせん〜と云ふとん
五小ノ才六節
やん〜と云ふは〜ら
源の所兄才之云。葵の
教王たちでれと云○
内りてさ〜のこよな
ま〜源をほ露をのけ
〜さま〜○いと
〜さ〜りま〜色よ
〜さ〜珠更源をさ
け〜さ〜○さ〜らよ
はハおをおまの〜さ
中ねは源よま〜と
そり今なる〜○さ
あま〜ちヨットシタ
る〜○いと〜挑争
○娘のほひとつが
ら中ねの葵上
と同一さ大まの腹と

おひひける。五小段の才五節。葵上よて源と中ねと作
の〜れ餘波〜○はあ〜や世の中〜とあるを細流と咲花
2.引あ未勘唯世を觀〜るん〜とある。餘我よ。按よ六帖
卷四よ人ことハあまのあるもよま〜と云。あをさ〜
やよの中〜さ〜り。はよ〜の山なる〜とあれを人言の志
けきをおひひ〜る。うハよの誤るる〜とあり。さ〜て
おのまも考あれ〜るを別記よ〜〜とあり。さ〜て
やむ〜さ〜は〜ら〜のみ〜さ〜だよ〜。帝
は〜る〜の〜さ〜ま〜。さ〜ら〜り〜
いと〜さ〜りま〜色よ〜をさ〜の中ねは。さら
にお〜れ〜れ〜と。さ〜あ〜さ〜とよはけ
て。思ひ〜さ〜さ〜えぬ。このま〜と
りぞ。娘のほひとつがら中ねの葵上
〜み

源氏物語

お葉のあ

三十六

〇みづの皇子と云
 づり源ハ皇子とい
 ふ事ぞと〇引れハ
 お好ハ五王に中ね
 の父ハ大五の中よて
 お好えとあると〇
 〇又さくら大末版之
 大切ハ人よもやま
 かれてそだちたれハ
 〇何ぞのり云ハ
 源と何ほどおと分
 際とハ中ねハ思をぬ
 と〇〇この中ねハ
 のいここと源と中
 ねとの中ねの挑と争
 ひハ〇〇引れどりの
 さくらをさまたれ
 づくたハさすくふと
 ごとめらたりと

どの皇子と云
 れト大五とまきゆれどはね色といふ事ぞ
 〇〇引れハ
 お好ハ五王に中ね
 の父ハ大五の中よて
 お好えとあると〇
 〇又さくら大末版之
 大切ハ人よもやま
 かれてそだちたれハ
 〇何ぞのり云ハ
 源と何ほどおと分
 際とハ中ねハ思をぬ
 と〇〇この中ねハ
 のいここと源と中
 ねとの中ねの挑と争
 ひハ〇〇引れどりの
 さくらをさまたれ
 づくたハさすくふと
 ごとめらたりと

廿一号十

五ノ中七第
 〇〇引れハ
 お好ハ五王に中ね
 の父ハ大五の中よて
 お好えとあると〇
 〇又さくら大末版之
 大切ハ人よもやま
 かれてそだちたれハ
 〇何ぞのり云ハ
 源と何ほどおと分
 際とハ中ねハ思をぬ
 と〇〇この中ねハ
 のいここと源と中
 ねとの中ねの挑と争
 ひハ〇〇引れどりの
 さくらをさまたれ
 づくたハさすくふと
 ごとめらたりと

〇〇引れハ
 お好ハ五王に中ね
 の父ハ大五の中よて
 お好えとあると〇
 〇又さくら大末版之
 大切ハ人よもやま
 かれてそだちたれハ
 〇何ぞのり云ハ
 源と何ほどおと分
 際とハ中ねハ思をぬ
 と〇〇この中ねハ
 のいここと源と中
 ねとの中ねの挑と争
 ひハ〇〇引れどりの
 さくらをさまたれ
 づくたハさすくふと
 ごとめらたりと

源氏物語

お集のあ

三十七

阿ひびの光陰のく
 るいとギヤナアをよ
 よ及びちまき人をよ
 よ付てぬと○おひ
 まけ生長と○い
 たてまつりてい
 げにまき生長一るよ
 きたてひて源とを
 したまひていひの
 一○おひのよと
 なるまき源のよは
 ころをよとてお
 げよと○げよと
 へよまよとまよと源
 の容良よとよとま
 りよ作りて源よ
 おとらぬうちあり
 さあに又ちあらんと
 ○月日のひありの云
 云いあまの源よ似る

ど。おひひよる人るまきたりり。げよら
 さあよつらつらつてのは。おとらぬありさ
 へよよよいぞもの。源をま。月日のひり
 のるよあまひもやうよぞよのくかお
 る』五小段の才七節。七月は毒后よまひ源
 氏の文宰相よるまのよとを叙せり。是迄を
 五小段とて。げ段をまて源月信の一段なるを。され
 どうもさうてるん。と才七節よて尾を結ひ源後あら
 ためて。さう七月よまきさるあひ。と才七節を加へ
 る。は。げ毒のそよ。帝后毒をい。は。露愛せさせのひ
 て。試樂をさく。ともにん。とある。文脈を受て。げひ。さ
 て。げの毒の伏案を起し。おく。文法。ま。げの毒の
 伏案。と。げよ。帝。おま。おさ。せ。る。ん。の。は。ん。つ。ひ。ち。う。う。を
 りて。げ。あま。を。坊。よ。と。思。ひ。す。ま。さ。せ。の。あ。ま。い。う。う。と。志。の。よ
 び。き。人。あ。ま。を。せ。げ。されど。ま。あ。の。は。せ。いと。ち。の。く。な。り。ぬ。れ
 ば。げ。い。ひ。を。ま。は。位。なり。る。ど。あ。ま。を。い。ん。と。ま。は。る。

廿一号十二

るを評していふ
 さく源とあまの
 源ありまのいと
 よく似る八月
 と日の光の太
 て似るまひた
 めくならんと世間
 の人々あま
 へびひりとり
 こしとて、例の全篇
 の眼目、

の毒れ伏案よて。花宴巻と葵巻との間よ移て。相毒の
 帝ありあひひて。赤雀院の毒世とたり。葵巻よ。あま
 ままよまひひて。源の源。源とたり。弘徽殿女侍ハ
 皇太后まよるり。のふるをまめせ。を。え。る。げ。これ皆
 まのよを。源よ。せ。ぬ。作者の用意を。り。○又。あま
 源よ。似。る。状。を。む。け。る。よ。も。は。娘。ハ。毒。毒。の。ま。ま。つ。ん。ま。き
 とも。お。げ。た。ま。は。つ。よ。次。は。内。裡。の。人。々の。あ。ま。を。え。る。り
 て。源。に。似。る。り。と。ま。ま。や。く。ま。ま。を。叙。し。げ。よ。世。間。の。人。々
 も。あ。ま。と。ま。ま。を。り。て。月。日。の。光。陰。に。ま。ま。ひ。た。る。や。う。も。あ
 ふ。ま。は。る。る。ハ。相。毒。の。毒。れ。毒。れ。を。評。した。る。あ。ま。と。合。く。お。れ
 ト。文。法。よ。て。上。る。よ。と。い。ひ。何。り。ま。ま。ら。び。あ。ち。ま。ち。よ。下
 よ。あ。ま。ぶ。と。ま。ら。り。源。志。め。せ。る。ん。よ。く。源。を。い。ん。て。え。る。あ。ま。

紅葉賀の巻終

廿一
号十三

